

NACOME

全国大学音楽教育学会 関西地区学会
平成 29 年度 後期研究会

平成 30 年 1 月 7 日 (日) 13:00~16:40

三木楽器開成館

大阪市中央区北久宝寺町 3-3-4

主催 全国大学音楽教育学会 関西地区学会

全国大学音楽教育学会 関西地区学会
平成 29 年度 後期研究会

プログラム

I. 学会諸連絡 (13:00) 司会: 山岸 徹

学会諸連絡、理事会報告、その他 (山岸 徹、生地加代、衣川久美子)

II. 研究口頭発表 (13:15~13:45)

1. ○田口 雅夫 (東京福祉大学短期大学部)、高崎 和子 (秋草学園短期大学)
中田喜直「めだかのがっこう」を例に、簡易伴奏に関する一考察

III. 研究演奏発表 (13:47~14:50)

1. ピアノ独奏 久野 以早夫 (東京福祉大学名古屋キャンパス)
シューベルト作曲: 「4つの即興曲」作品90 より 第4番 変イ長調
2. ピアノ独奏 永井 正幸 (大阪青山大学)
オギンスキ作曲: 「マズルカ」ト長調
シマノフスカ作曲: 『18の舞曲』より 第16番「カドリユ」ヘ長調
モニウシュコ作曲: 「ポロネーズ」変ホ長調
シマノフスキ作曲: 『4つのポーランド舞曲』より 第2番「クラコヴィアク」ヘ長調
3. ピアノ独奏 奥田 昌代 (大阪信愛女学院短期大学)
リスト作曲: 『3つの演奏会用練習曲』より 「ため息」
4. ピアノ独奏 小谷 朋子 (常磐会短期大学)
ドビュッシー作曲: 『前奏曲第1集』より
第5曲「アナカプリの丘」、第8曲「亜麻色の髪の乙女」
5. ピアノ独奏 井本 英子 (夙川学院短期大学)
ドビュッシー作曲~文部省唱歌: 「月の光~月~うさぎ」

* * * * *

6. ピアノ連弾 フリモ: 古庵 晶子 (京都ノートルダム女子大学)
セコンド: 鷺見 三千代 (園田学園女子大学短期大学部)
モーツァルト作曲: 「四手のためのピアノ・ソナタ」K.521 より第1楽章

7. ピアノ連弾 プリモ：前北 恵美（兵庫大学）
セコンド：津田 安紀子（兵庫大学）
中田喜直作曲：四手連弾のための組曲『日本の四季』より
「初秋から秋へ」、「冬がきて雪が降りはじめ、氷の世界に、やがて春の日差しが」
8. ピアノ連弾 プリモ：白倉 朋子（大阪芸術大学）
セコンド：深田 直子（大阪総合保育大学）
篠原 真 作曲：「五つの風景」

* * * * *

IV. 講演 (15:00~16:20)

講師：畠澤 郎（全国大学音楽教育学会名誉理事長）

演題：教えることと育てること ～教師の音楽指導観について考える～

我が国の教育に欧米音楽のシステムが導入されてそろそろ 150 年を迎えますが、その間における音楽教育者の努力によって、今やクラシックに限らずポピュラー音楽の分野においても世界的に活躍する音楽家が多数輩出されています。

しかし、その多くは専門教育によるものであり、教育界の問題として“学校音楽校門を出でず”が取り上げられて久しいように、学校における音楽教育は好ましい状況が続いてきたとは言えません。

ここでは、学校音楽が今日まで抱えてきた問題を明らかにするとともに、今後の音楽科教育のあり方について皆様とともに考えたいと思います。

質疑応答 司会：永井 正幸

【畠澤 郎 先生 プロフィール】

東京学芸大学特設音楽科卒業

東京都立川女子高等学校、東京学芸大学附属竹早中学校、同小金井小学校の現場教員を経て北海道教育大学旭川分校、奈良教育大学、日本女子大学、鹿児島大学、椋山女学園大学、鹿児島国際大学に勤務。

研究口頭発表要旨

1. 中田喜直「めだかのがっこう」を例に、簡易伴奏に関する一考察

○田口 雅夫（東京福祉大学短期大学部）、高崎 和子（秋草学園短期大学）

純真で無垢な子どもの心を豊かに、さらに人間らしい優しさや思いやり、そして夢を持つ心を育む歌が童謡であることは今更いうべきことでもありません。現存する童謡には、それらの要素を言葉から、メロディーから、そしてハーモニーからよく感じとることができます。しかし、その素晴らしい童謡が、簡易伴奏によって壊されたり汚されたりしていることが多々あるのです。

そこで私達は日本独自の歌「童謡」を子どもたちが歌い続けてくれるために、作者が想いを託したオリジナルの素晴らしさを極力崩さず、しかし右手は単旋律で、左手は簡易伴奏を用いて易しくできないものか、と実例を基に比較検証し考察したいと思います。

研究演奏発表要旨

1. ピアノ独奏 シューベルト作曲 「4つの即興曲」作品90 より 第4番 変イ長調

久野 以早夫（東京福祉大学名古屋キャンパス）

永年にわたり連弾を研究の課題としてきたが、今回ソロに挑戦することにした。集中力と表現する心の高揚がどれだけ維持できるか実践してみたい。

選曲に当たって特に心掛けたことは、自分の技量にあった曲、曲想が常に思い浮かび演奏したいと思う曲、巨匠の演奏を聴いて感動した曲、などを考慮して決定した。

この曲は素早い分散和音が印象的なピアニスティックな曲である。繊細で悲しくなるような美しさを持ち、分散和音が微妙に表情を変え、同時にチェロが歌うような美しいメロディーが低音部に表れ、シューベルトならではの美しさを醸し出している。中間部の連打による伴奏に支えられて高まっていくメロディーはシューベルトに秘められた情熱を感じられる

2. ピアノ独奏 オギンスキ作曲 「マズルカ」ト長調 シマノフスカ作曲 『18の舞曲』より 第16番「カドリーユ」へ長調 モニウシュコ作曲 「ポロネーズ」変ホ長調 シマノフスキ作曲 『4つのポーランド舞曲』より 第2番「クラコヴィアク」へ長調

永井 正幸（大阪青山大学）

オギンスキ(1765~1833)・シマノフスカ(1789~1831)・モニウシュコ(1819~1872)・シマノフスキ(1882~1937)は、いずれもポーランドの作曲家であり、マズルカやポロネーズなどポーランド民俗舞踊に基づいた魅力的な作品を残している。今回は、マズルカ・ポロネーズ・クラコヴィアクにフランスのカドリーユを含めた4種類の異なる舞曲を、その特長を踏まえながら発表する。

「マズルカ」とは、マズール・クヤヴィアク・オベレクなど独自のリズムパターンを持つ舞踊形式の総称である。本作品では、リズムに表情を持たせるために、右手の連続する16分音符の細かなアーティキュレーションが重要である。

「カドリーユ」とは、18世紀から19世紀にかけてフランスで広まった舞踊で、四角形に4組の男女が配置されて踊る。この作品では、途中8小節のワルツが現れるが、カドリーユもワルツも優美な拍子感が求められる。

「ポロネーズ」は、四分の三拍子の国民的舞踊で、祝祭の場などで踊ることが多い。中庸の速度で、第一歩をやや深めに踏み出すことを意識しながら、リズムを表現する。

「クラコヴィアク」は、クラクフ地方に伝わる2拍子の舞踊のことである。本作品では、澁刺としたシンコペーションや、哀愁漂うMeno mossoなど、作曲者の豊かな楽想が随所に見られる。表現としては、アクセントだけでなく、頻繁にある速度変化や音色変化を考慮しなければならない。

3. ピアノ独奏 リスト作曲 『3つの演奏会用練習曲』より「ため息」

奥田 昌代（大阪信愛女学院短期大学）

ハンガリー生まれのリストは幼少の頃から類まれなる才能を発揮し、ウィーンからパリでリサイタルを行い驚異的な成功をおさめた時はまだ12歳であった。ヴィルトゥオーソ・ピアニストとして音楽界、文学界、社交界の著名人との交流も盛んで、華やかな演奏活動が続けていたが、1848年リスト37歳の頃に突如引退を表明する。この曲はその年に作曲されたものである。

超絶技巧が持てはやされていたパリ時代、パガニーニのヴァイオリン演奏に衝撃を受け、「私はピアノのパガニーニになるのだ」と言ったと伝えられているが、年とともに芸術的関心は深く内面に向かうようになってゆき、晩年は宗教的な高みを追い求める曲を創るようになっていく。この曲は、その入り口に立った時の曲だともいえる。“ため息”は作曲者本人の命名ではないが、この曲の雰囲気をよく現している。

発表者が過去（学生時代）に取り組んだ曲であるが、最近聴く機会があり感銘を受け、今ならまた違った演奏が出来るのではないかと思い、研究課題とした。

4. ピアノ独奏 ドビュッシー作曲 『前奏曲第1集』より 第5曲「アナカプリの丘」 第8曲「亜麻色の髪の乙女」

小谷 朋子（常磐会短期大学）

ドビュッシーの円熟期の代表作品である前奏曲集第1巻は、構成する12曲の曲同士が曲想その他対照の妙を発揮するようにゆるやかに配列されている。調性が取り払われ、そして絵画的なタイトルを譜面の最後に書き記したことで、聴き手における自由で豊かなイメージの喚起を図っているのである。

私は、ドビュッシーのピアノ作品の中で、以下の2点にとりわけ魅力を感じる。

1点目は、前奏曲集の曲の配列とタイトル表記の手法である。作曲家が、演奏家と聴衆の心に寄り添い、何の束縛も与えずに曲の印象を素直に感じ取ってもらいたいという一途な思いが表れている気がするからである。

2点目は、和声的旋律的構造的な面から「時間」「空間」が巧みに描かれている点である。

幼稚園における子どもの音楽的活動を観察し、幼児にとっての最も大切な音や音楽とは何か？を考える機会が最近増えてきた。ドビュッシーのピアノ作品を演奏することで自らの聴覚を研ぎ澄まし、音や音楽の広がりを感じ、その感覚により子どもの音とのかかわり方を捉える一つのきっかけと繋げていきたい。

5. ピアノ独奏 ドビュッシー作曲～文部省唱歌 「月の光～月～うさぎ」

井本 英子（夙川学院短期大学）

ドビュッシー作曲の『月の光』を中心にして、月にうさぎの姿を映した日本らしいわらべ唄『うさぎ』と、「尋常小学唱歌」に半世紀近くにわたって掲載されてきた『月』を織り交ぜて編曲。『月の光』で始まりいつのまにか『月』になり、また『月の光』にもどる。次に『うさぎ』になり『月の光』に戻って終わる構成。完成されたピアノ曲を別のピアノ曲に編曲する意図は、児童や学生、広く一般の方々にクラシックのピアノ曲の演奏を楽しんで聴いて頂きたいというところにある。音楽を聴く時、全体の雰囲気を感じその気分を味わうのみならず音楽の諸要素を捉えて聴くと一層深くその曲への愛着や憧れを感じて幸せなひと時となる。今回は諸要素の中でも比較的捉えやすいメロディーに着目する聴き方を示唆。知っているメロディーを見つけながら聴くというわかりやすい指標を提示する手法を用いた。更にピアノ曲への興味が広がることに繋がっていく一助となればと思う。

6. ピアノ連弾 モーツァルト作曲 「四手のためのピアノ・ソナタ」 K.521 より 第1楽章

プ リ モ：古庵 晶子（京都ノートルダム女子大学）

セコンド：鷺見 三千代（園田学園女子大学短期大学部）

モーツァルトは、この曲を友人のゴットフリート・ジャカンの妹フランツィスカに贈ったことが知られている。モーツァルトは演奏者の力量に合わせて作曲するのが常だったことを考えると、フランツィスカはかなりの腕前を持っていたかもしれず、このソナタで彼女はピアノの達人と対等に演奏する「難しさ」を求められたのであった。歌手でモーツァルトのピアノの弟子であった彼女にモーツァルトが同封した手紙の中に「少し難しいから、すぐに取りかかるようにね。」とある。

このソナタの最初のアレグロには不安の影もなく、アクセントのある生き生きとした音が呼びかけのように鳴り響き、フレーズの掛け合いや四手の細かい音の揃った動きによる流れるような表情がすばらしい。細かい音を揃えることで曲の魅力が倍増すると思うので、この難関を乗り切って音楽の楽しさを手中に収めたいものである。

7. ピアノ連弾 中田喜直作曲：四手連弾のための組曲『日本の四季』より 「初秋から秋へ」

「冬がきて雪が降りはじめ、氷の世界に、やがて春の日差しが」

プリモ：前北 恵美（兵庫大学）

セコンド：津田 安紀子（兵庫大学）

ピアノ連弾の魅力の一つには、パートナーとの呼吸や音色、曲の解釈などをお互いに尊重しながら演奏することにより、より豊かな音楽を創造できることがあげられる。また、相手の音を常に聴きながら演奏しなければならないという点で「他者を意識した演奏」でもあり、このことは保育現場で必要とされる弾き歌いの能力、すなわち乳幼児という他者を意識した演奏にも通ずるものがあるのではないだろうか。

四手連弾のための組曲「日本の四季」は、複雑な和声や転調によって様々な自然界の現象が表現されつつ、その中に日本の四季を歌った歌曲や唱歌のメロディーが随所に出てくる親しみやすい作品となっている。

保育士養成校における授業内では、季節に応じた作品を指導する機会が多い。しかし時間に追われ、歌詞の内容や曲の雰囲気味わう時間を多くは設けられないことが現状である。演奏技術そのものを伝授することも大切ではあるが、本研究を通じて、音楽の美しさや楽しさを感じ共有するといった音楽教育の原点を再認識するきっかけになればと考える。

8. ピアノ連弾 篠原 真 作曲 「五つの風景」

プリモ：白倉 朋子（大阪芸術大学）

セコンド：深田 直子（大阪総合保育大学）

ピアノ指導において、難しい課題に躓きやる気が出ない学生に対して、演奏にこちらが少し伴奏を付けて連弾することで、弾けた！と自信を持ち、ピアノを弾く楽しさを感じてくれることがある。そのためレッスンでは、時々簡単な連弾曲を取り入れるようにしている。特に曲名からイメージできる曲は、取り組みやすいように思われる。

篠原真作曲の「五つの風景」は、美しく豊かな音が流れる作品であり、演奏者自身の心の中にある情景を思い描いて表現できる曲である。

本日はその中から、あたたかさを感じる1. 陽だまりの中で、楽しいワルツの3. あたらしい季節の訪れ、元気で拍子が頻繁に変わる5. 思い出のはじまり、の3曲を演奏する。